復刻『幼児の教育』（大正・昭和篇）によせて

本田和子

『幼児の教育』誌、第II期分（大正十年～昭和十九年）の復刻が完了した。これで、戦前の本誌は、その全貌を、白日の光の下に晒したわけである。

歴史は、世界を二分した二つの大戦のはざまに位置するこの時代を、「暗い谷間の時」として徴づける。確かに、大正自由主義は、束の間の仇花のように影を潜め、思想及び文化の各領域に統制の枠が強まり、巷に軍靴の響きのみ高いこの時代は、子ども史にとっても、寒く厳しい冬の訪れに相違なく、受難の日々であった筈である。

然し、本誌を通観して感じさせられるのは、次のようなことではないだろうか。すなわち、時代の流れの大まかな色分けと、幼稚園という世界を貫流した時間とは、そして、その色とにおいとは、必ずしも、機械的に対応するとは限らない、と言うことなのだ。

この時代に、幼児保育界は、「幼稚園令の公布」という画期的な出来事に遭遇しているという事情もある。倉橋惣三に指導された「誘導保育」の実践が、昭和に入って花開いたという、そんな動向も大きく作用しているに相違ない。しかも、それらに加えて、暗くきびしい冬だからこそ、幼い人たちの上には温かな陽光を望む大人たちの想いが、保育界を、ことさらに、平和で穏かな場所として保

たせ続けたのでもあろう。大正の末から昭和へと歩む保育界は、『幼児の教育』の誌面に、子どもたちの生活を、ひら〳〵と楽しげに、舞い踊らせているのだ。

例えば、口絵としてしば〳〵登場する幼児の写真は、清潔な、真白のエプロン姿を写し出して、その爽かさを際立たせる。当時の園児たちは、何とまあ、揃いも揃って、大きな白いエプロンで身を装うているのだろう。

口絵に、幼児の写真が用いられ始めたのは、第二十六巻（大正十五年）あたりからである。二十六巻の九号には、「富士見幼稚園の砂遊び自動車」と題された四葉の写真が掲載されている。木片を組立てて、三人乗りの大きな自動車を作っている園児たちの姿が、達者なカメラさばきで、鮮かに写し出されているのだ。

そして、第二十七巻第二号（昭和二年二月）は、大きな旅券をかかえた三体の西洋人形を登場させた。アメリカから贈られた親善人形の一部である。因みに、同誌に掲載された口絵写真の説明記事は、次のようであった。

「文部省でお宿をしてゐるといふ、アメリカから訪ねて来た先着のお人形さんを見せていたゞきました。

今までに新聞やなんかで委しく紹介されましたから、もう御承知のことでございませうが、各々のお人形さんは、みんな旅行免状を持ってゐました。それには写真が添へてあり、名まへ産地は無論のこと、目の色鼻の形、髪の色口の形まで記入してございます。又向ふの少女から我国の少女に宛てたお手紙もあって、それには、そのお人形さんの生活をくわしく知らせてあるのでございます。旅装も到れり尽せりで、丸で大切にされてゐる一人子の様でした。中でも、贅沢なお人形さんは、立派な手頃の革製のトランクを持って来て居ました。その中には洗面道具、結髪、化粧道具、衣服類（夏冬、平常着、晴着）、靴、靴下、ハケ、何でもかんでもちゃんと整へて、幾通りも入ってゐました。牧師さんらしい風采をしたお人形さんが、小形のバイブルを持ってゐるのには思はずも微笑させられました。うつむく時、目を伏せながらママーと優しい声を出すなど、可愛らしくも驚くばかり精巧なものでございます。

何れは皆さんの幼稚園にも訪ねて行く事でございませうが、一寸お先きに口絵で、写真を御紹介いたして置きました次第です。（編者）」

こゝには、海を渡ってきた「文明」に寄せられる新鮮な興味が呼吸づいている。恐らくは、人間に負けないほどの精巧さに作り上げられた人形の一つ々々が、珍しく、羨しく、好奇心をそそった

のであろう。そして、人形に向けられた興味と関心は、そのまま、その背景をなす異国の文明へと、素直に、注がれているではないか。こんな人形を作り出し、こんな旅仕度をさせて送り出した人々の生活。それらは、海の彼方に、蜃気楼のように見えかくれする幻であった。

考えてみれば、昭和初期の園児たちが、さながら、制服のように身につけている白いエプロンも、海を越えてきた外来文明の一つであった。洋式エプロンが初めて紹介されたのは、明治四十年代であると言う。当時の小説のあるものは、女主人公にエプロンをつけさせることで、「新しさ」と「自我」を象徴させようとした。それが、十数年の時の経過の中で、いつか、幼稚園を象徴するものとなっていったのである。より正確には、「幼稚園の都会性と中流性」をと、言うべきであろうか。

こう見てくると、写真の園児たちが、常に真白なエプロンをひらひらさせているのと、親善人形がいち早く取材され、口絵に紹介されているのは、同じ一つの「徴」を与えらるべき現象である。すなわち、当時の幼稚園界は、貧しさより豊かさ、土臭さよりバタ臭さ、そして、やぼったさよりもスマートさを、体現するものとして位置づくのだ。少くとも、『幼児の教育』誌においては……。

欧米幼稚園の視察記事や、海外児童文学の紹介が、くり返し誌上を飾るのも、一連の現象と言い得よう。

ところで、暗い谷間のこの時代に、もう一箇所、ひら〳〵と華麗な夢の舞い戯れる場所が出現している。吉屋信子の少女小説と、中原淳一の抒情画に代表される「少女文化の世界」がそれである。

そこは、フリージヤや忘れな草の甘い香りが充満し、クレープデシンのサンドレスや、オーガンジーの避暑服が、その裾をさざ波だてる乙女たちの世界だった。物語の女主人公たちは、何と美しい運命を与えられ、常に髪のリボンを風にさまよわせながら、その大きく見開かれた瞳で、自分だけの世界を見つめていることだろう。彼女たちは、間違っても、時局などというおぞましいものに、目を向けようとはしない。

戦局の拡大と共に、信子、淳一という少女文化の旗手たちが、筆を折らされたのは、当然の経緯であった。彼らが作り出したのは、リボンやフリルで飾られた小さな閉じられた世界であり、少女たちをその中に封じ込めて、思いっ切り、ひら〳〵とひるがえる夢に遊ばせたのである。そこは、「皇道精神」とも、「挙国体制」とも、全く無縁の、別天地だったのだ。

こゝには、「幼稚園界」と「少女文化の世界」に共通する独特の性格が顔をのぞかせている。この両者が、暗い時代のひとときを、それとはかかわりなく、ひら〳〵と華やかに、「都会的・中流的な快さ」を追うことで費したのは、それらが、社会の周縁に位置し、体制に組み込まれていなかったことの証である。

「幼稚園」は、明治以降、久しく教育界の継子であって、中心から遠く、「少女文化」に至っては、蔑視の対象でしかない。かといって、それらは、積極的に抑圧や迫害を受けたわけではなく、ただ、さり気なく無視され、忘れられていたという状態であった。こうして、権力からの疎外が続くとき、そこには、自ずから、これら弱少勢力だけの小集団が形成される。彼らは、権力に向かって主張したり抗議したりすることもない代りに、外部に対して極端に閉鎖的となり、結果として、外の動きと無関係に、自分たちだけの営みに自足するゆとりを持つ。

無謀な戦いに子どもを巻き込み、破滅に向かってひた走る国家権力に対して、『幼児の教育』誌が、格別の態度を示さず、保育界という閉じられた世界の中でのみ、「一人々々の充実」という夢を追い続けたのは、このような事情の上で読み解かるべき現象であろう。それは、単に、倉橋惣三という指導者の個性にのみ基因するのではあるまい。ただし、同時に、目の前の幼児こそすべてであって、普遍的・超越的価値に己れを賭けない、という倉橋の個性を、最もよく機能させ得たのが、この小集団のダイナミズムであったことも確かであろう。

『幼児の教育』誌の復刻は、本誌を拠点とする幼稚園界の大戦下のありようを、すべて、白日の光の下にさらけ出して見せる。従って、これらをもとに、戦時下の指導者たちの抵抗精神の乏しさを指摘し、体制迎合を批判することは容易である。確かに、太平洋戦争に前後する第四十巻あたりから、国家色・戦時色の濃い論説が、巻頭を飾り始めたのだから。

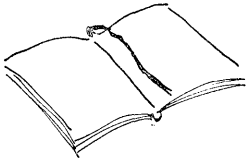
然し、こうした図式的な批判にもまして、幼稚園界の示す閉鎖性と自足性、外部から遮断された真空地帯で展開されるこの特異なありようにこそ、目が配られその意味が問わるべきではないか。事実、「国民幼稚園」が提唱され、「国策遂行」がうたい上げられる勇ましい論説と裏腹に、営々と展開されているのは、極く日常的な保育上の問題であり、童話や童謡の紹介なのだ。

例えば、第四十巻の誌上を飾る「フレーベル賞入選童話・童謡」は、「鼠さんのお引越」「逃げない小鳥」、或いは「ピアノお道」「お窓の雨」など、硝煙のに

おいもとどめないのどかさである。ヨハンナ・スピリの「ハイディ」の飜訳紹介も、第三十八巻から第四十巻まで、続けられている。「戦時保育所」への転換が指示され、東京都に「幼稚園閉鎖令」の出された昭和十九年に至ってすら、第四十四巻の誌上には、「人形の家」の作り方が紹介され、「白ちゃん兎」というお話遊びが報告される何気なさなのだ。

権力に抗して敢然と起ち、その悪を指弾することは、勇気ある行為である。国を挙げて同じ言葉を口にしたあの時代に、平和を叫んで獄につながれたとしたら、それは、英雄の名に値しよう。『幼児の教育』誌があらわにするのは、斯界におけるそのような英雄の姿ではなかった。

然し、本誌は、どのような時勢の下でも、決して眦を決しない奇妙な集団の姿を浮き彫りにして見せる。彼らは、格別、平和を叫ぶこともなく、ただ、戦士たちへの感謝をのみ口にしながら、坦々と日常的な保育活動にいそしみ、保育法の改良に余念がない。ことの可否は別として、ここに露呈されているのは、わが国保育界の本質的性格ではないか。その意味を、いかに問い直すかが、今後に残された課題と言えよう。



幼児の教育 第七十九巻 第十一号

十一月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年 十月二十五日 印刷
昭和五十五年十一月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人 津守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発行所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。